

# 萬葉植物便覧

若 浜 汐 子

## アカネ

あかね アカネ科の宿根草。

葉は心臟形で四枚づつ輪生し、葉は方形で一面に逆刺がある。秋、黄色の小花が群がる。根を染料とした。万葉では実際の染料でなく、日・紫・君・屋等に懸る枕詞としてだけ使はれてゐる。

茜草アカネさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王 1 二〇

茜アカネさす日は照らせれどぬば玉の夜渡る月の隔らく惜しも

柿本人麿 2 一六九

(4 五六五 6 九一六 11 二二三三三)

## アキノカ

まつたけ マツタケ科。

秋の味覚の代表として今日も親しい。赤松の林に多く発生する。

高松のこの峯も狹に笠立ててみ盆盛りたる秋香のよさ

10 二二三三

## アサ

あさ クハ科の一年生の草本。

古昔から栽培した。葉は五裂から九裂ぐらゐの掌の形で対生する。古代の重要な繊維材料であつた。

一方、ア又はソとも呼ぶが、主として繊維の場合に用ゐる、時に

植物としての場合にいふこともあつた。麻アサ裳・麻衾・麻衣・麻布アサ小衾等と見える。

又枕詞としても用ゐられた。

朝裳アサよし紀人羨しも亦打山行き来と見らむ紀人羨しも

調首アサ淡海 1 五五

庭に立つ麻手刈り干し頻まき曝あびす東女あづまを忘れたまふな

常陸娘女 4 五二一

麻衣著ればなつかし紀の国の妹背の山に麻あ時く吾妹

7 一一九五

(9 一八〇七 11 二六八七 2 一九九等)

## アサガホ

未詳。

ムクゲ・キキヨウ・ヒルガホ・アサガホ等の諸説あるが、今日の朝顔は平安朝の輸入植物だから問題に出来ない。他の三種のうちで桔梗説が最も支持者が多い。桔梗は新撰字鏡にアサガホと訓んでゐる。

芽はが花尾花葛花なでしこの花姫おんなへし又藤袴朝顔の花

山上憶良 8 一五三八

朝果アサガホは朝露負ひて咲くと云へど夕陰にこそ咲き益りけれ

10 二一〇四

展ひ転ひひ恐は死ぬともいぢるく色には出でじ朝容あそ貌の花

10 二二七四

## アシ

あし 水辺に生ずる多年生の草本。

豊葦原といはれる如く古代日本は湿地多く葦が多かつた。燃料や、垣などにした歌も見える。

葦<sup>アシ</sup>辺ゆく鴨の羽交に霜降りて寒き夕べは大和し念ほゆ

志貴皇子 1六四

吾が聞きし耳に好く似つ葦<sup>アシ</sup>のうれの足痛き吾が背勤めたぶべ

石川女郎 2一七八

花<sup>はな</sup>細し葦垣越しにただ一目あひ見し見故千たび嘆きつ

11二五六五

家<sup>アシ</sup>ろには安之火焚けども住みよけを筑紫に到りて恋ふしけも  
はも

20四四一九

アシツキ

あしつきのり ネンジュモ科。

(2一六七 3三五二 4五七五等)

滋賀県と富山県の庄川にのみ産する海苔。詳細は一越中万葉地理研究教題」の御旅屋氏の説に見える。柔かい寒天様の囊状をした藻で約十センチ程ある。今日では殆ど衰退に瀕してゐる。例歌は家持の一首のみで甚だめづらしいものである。

雄神河くれなるにはふ少女等し葦<sup>アシ</sup>附<sup>の</sup>取<sup>り</sup>と瀬に立たすら  
し 大伴家持 17四〇二一

アシビ

あせほ シヤクナゲ科の常緑灌木。

山地に生ずる。葉は革質で鋸齒がある。春、白色の壺形の小花が房をなして咲く。万葉人はこの花をよく歌つてゐる。  
枕詞としても使はれる。

磯の上に生ふる馬酔木を手折らぬど見すべき君が在りと言は  
なくに 2一六六

春山の馬酔の花の悪しからぬ長き春日を恋ひや暮さむ

10一九二六

磯かけの見ゆる池水照るまでに咲ける安之婢の散らまく惜し

アヂサキ

あぢさゐ ユキノシタ科の落葉灌木。

大伴家持 20四五一三

普通「紫陽花」の漢字をあてるがこれは誤用で、この木は純日本産であることを牧野博士が発表されてゐる。

言間はぬ木すら味狭藍諸茅等が練の群言に詐かえけり

4七七三

アツサ

未詳。

古来難問題とされ諸説が立てられた。アカメガシハ・キササゲがその有力なものであるが白井光太郎氏がミツメ一名ヨグソミネバリ説を立てられた。古代はこの木で弓を造つたものである。その弓の木材を顕微鏡で検べられたといふことであるから最も信憑性が強いものと思はれる。

アツサを詠んだものは極めて多いがその殆どがアツサの木そのものを詠んだものなくみな「梓弓」と歌はれてゐる。さうして枕詞として用ゐられたものが多い。

やすみしし わが大王の 朝には とり撫でたまひ 夕には  
い倚り立たしし 御執らしの 梓の弓の 長弭の音すなり  
…… 間人連老 1三

アハ

あは ホモノ科の一年生草本。

早く記紀の神話に見え、古代の重要な食料であつた。  
千早振る神の社し無かりせば春日の野辺に粟蒔かましを

娘子 3四〇四

足柄の箱根の山に安波蒔きて実とはなれるを逢はなくもあや

**アフチ** せんだん センダン科の落葉喬木。  
葉は二回羽状複葉で縁は鋸歯がある。初夏淡紫色の極く小さい花が群がる。実は黄色の球状をなして垂れる。  
妹が見し阿布知の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに

14 三三六四

**アフヒ** ふゆあふひ アフヒ科の二年生草本。

葉は五裂から七裂ぐらゐの掌状で花は五瓣の淡紅色。根・葉及び実を食料とする。

梨鬚黍に粟嗣は延は田葛くわの後も逢はむと葵花咲く

16 三三三四

**アベタチバナ** 未詳。

諸説あつてまだ定説がない。ダイダイ・ミカン・クネンボとも言ひ、或ひは饗アベタチバナの意ともし、又アベは地名とする説もある。

吾妹子に逢はず久しもうましもの阿倍橘あへの羅生らせいすまでに

11 二七五〇

**アヤマメグサ** しやうぶ サトイモ科の宿根草。

紫や白の美しい花の咲くのはハナアヤマメといつて別物。初夏穂花序をなして淡黄色の花を開く。劔のやうな葉の芳香を賞でて今日も五月の節句に用ゐる。万葉の代では、これを橘の花などと共に纏まとにした。

ほととぎす待てど来鳴かず高蒲草玉に貫く日を未だ遠みか

大伴家持 8 一四九〇

ほととぎすいとふ時なし安夜売具佐かづら纏まとにせむ日此ゆ鳴き渡

れ 田辺福麿 18 四〇三五

**アヲギリ** あをぎり。

引例のやうに「梧桐」とあるがこの字面ならアヲギリのことである。併しアヲギリは普通琴には作らないとされてゐるので甚だ疑問である。左の題詞は大伴旅人が夢の中で琴の精の処女に会ふといふ内容の歌文の前に掲げられてゐるから、どうしても琴を作る木でなくてはならぬ。琴を作る木なら白桐即ち今日普通に簞箆その他の家具を作る桐の木のことである。だからこれは白桐とあるべきを誤つて梧桐（即ち青桐）と混同して書いたものであらう。

梧桐日本琴一面割片磐石山の猿様なり 5 八一〇題詞

**アヲナ** かぶら ジフジバナ科の一年生栽培植物。

今日もなほ食料として使はれるカブのことである。

食薦敷き蔓薯煮持ち来梁はりに行いか懸かけて休むこの君

長意吉麻呂 16 三八二五

**イチシ** 未詳。

古来種々の説がある。エゴノキ・ギシギシ・クサイチゴ等が主なるものだが、歌趣から判断してクサイチゴが最も適ふやうに見える。

路の辺の壹師いっしの花の灼然いっせつく人皆知りぬ吾が恋妻は

11 二四八〇

**イチヒ** いちひがし ブナ科の常緑喬木。

葉は長い楕円形で裏は灰色をおびた黄褐色で毛がある。

愛子 汝夫なせの君……あしひきの この片山に 二つ立つ

伊智比が本に……

16 三八八五

**イネ**

いね ホモノ科の一年生栽培植物。

古く日本に将来され我が国の主要穀物となつた。早稲・穂などとも詠まれてゐる。

吾妹子が菜と造れる秋の田の早穂の穂見れど飽かぬかも

大伴家持 8 一六二五

住吉の岸を田に墾り蒔きし稲さて刈るまでに会はぬ君かも

10 二二四四

鳩鳥の葛飾早稲を嘗すともその愛しきを外に立てめやも

14 三三八六

**イハキツラ**

未詳。

(10 二二三〇 14 三四五九 三五五〇等)

古来スベリヒユを当てる説が最も多いが、その他ミヅハコベも亦これに擬せられる。

二首あるが二首とも序詞として使はれてゐる。

入間道の大家が原の伊波為都良引かばぬれつつ吾にな絶えそ

14 三三七八

**ウケラ**

蒼朮 キク科の宿根草。

葉は三裂。秋、白又は紅の薺のやうな頭状花を開く、苗は食料となる。全部武蔵国に關した歌にだけ見える。

歌は三首とも恋の序として用ゐられてゐる。

恋しけば袖も振らむを武蔵野の宇家長が花の色に出なゆめ

14 三三七六

**ウノハナ**

うのはな・うつぎ。ユキノシタ科の落葉灌木。

葉は披針形で対生。五、六月の頃白い五瓣の花が円錐状に群がる。

集中うのはなの歌は多いが枕詞や序詞に使はれたもの極めて少く殆ど実景として詠まれてゐる。

宇能花も未だ咲かわばほととぎす佐保の山辺に來鳴きとよもす

8 一四七七

**ウハギ**

よめな キク科の多年生の草。

菊に似た花が秋咲くので野菊とも呼ばれる。若葉は食料になる。左の例歌も食用の場合。

妻もあらば採りてたげまし佐美の山野の上の宇波疑過ぎにけらすや

2 二二二一

**ウマラ**

のばら バラ科の落葉灌木。

葉は羽状複葉。五月頃五瓣の白い花を開き、秋、紅い球状の実を結ぶ。

歌は一首のみ。恋の譬喩として使はれてゐる。

道の辺の宇万良の末にはは豆のからまる君を離れか行かむ

20 四三五一

**ウメ**

うめ バラ科。

中国から初め薬用として渡來した植物。渡來後、その花が文雅の人々に愛せられた。懐風藻にも見え、万葉集には萩に次いで第二位の多数の用例を占めてゐる。

梅の花開きて散りぬと人は云へど吾が標結ひし枝ならめやも

**ウモ** さといも サトイモ科。

3 四〇〇

「家なる」とあるから家に食用として栽培されてゐたものと思ふ。蓮葉はかくこそあるもの意旨麻呂が家なるものは宇毛の葉にあらし

**ウリ** まくはうり ウリ科の一年生草本。

16 三八二六

西瓜や胡瓜は後世輸入されたものだから、例歌には適せず。恐らく真桑瓜をさしたものだらうと考へられる。

瓜食めば 子等思ほゆ 粟食めば ましてしぬばゆ……

5 八〇二

**エ** え ニレ科の落葉喬木。

葉は楕円形、縁の上部に鋸齒がある。初夏の頃薄い黄色の小花をつける。果は大豆ほどの球状。

吾が門の覆の實もり喫む百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ

16 三八七二

**オホキクサ** ふとゐ カヤツリグサ科の宿根草。

沼沢に生え、莖は円柱形をなし夏の頃莖の先に小さい花が集り咲く。席の材料になる。集中一例。恋の序として使はれてゐる。

上つ毛野伊奈良の沼の於保為具佐他に見しよは今こそまされ

14 三四一七

**オミノキ** もみ マツ科。

現在この名の木はないが、モミのことであらうといはれる。モミは山地に自生する常緑喬木。葉は細長く扁平で二列になつてゐる。

皇神祖の 神の命の (中略) 湯の上の 樹群を見れば 臣

の木も 生ひ継ぎにけり…… 山部赤人 10 三二二

**オモヒグサ** なんばんきせる ハマウツボ科の一年生草本。

薄の根に寄生すること多く、十五センチ位の莖の先にキセル形をした筒状の薄紫の花が咲く。

集中一例のみ。恋の序として用ゐられた。

道の辺の尾花が下の思草今さらになど物か念はむ

10 二二七〇

**カキツバタ** かきつばた イチハツ科の宿根草。

池や沼辺などに生ずる。初夏花アヤマに似た濃紫色又は白い花が咲く。摺り染の料とした。丹づらふ、開く等の枕詞としても用ゐられる。

墨吉の浅沢小野の垣津幡衣に摺りつけ着む日知らずも

7 一三六一

吾のみやかく恋すらむ垣津幡丹つらふ妹は如何にあるらむ

10 一九八六

**カシ** かし ブナ科。

カシにはシラカシ・アカガシ・アラカシ・イチヒガシ等種々あるがカシ全体を総称したものと考へられる。

莫鷲圍隣の大相七見つつ行け吾が背子が射て立たしけむ巖櫃

1 九

**カシハ** かしは ブナ科。

葉の周辺は大きな鋸形をなして大型である。後世の端午の節句に用ゐるものである。

例歌三首とも枕詞又は譬喩として使はれてゐる。

秋柏潤和川辺の細竹のめの人に忍べば君に勝へなく

**カタカゴ** かくくり ユリ科の宿根草。

11 二四七八

十五センチ程の茎に百合に似て可愛らしい薄紫の花が咲く。根は上等の澱粉となる。

もののふの八十嬌婦等が汲みまがふ寺井の上の堅香子の花  
19 四一四三

**カツノキ** ぬるで ハゼノキ科の落葉喬木。

葉は羽状複葉で葉柄に翅をつけてゐる。夏、枝の先に小さい白い花が群がる。

例歌一首、恋の序として使はれてゐる。

足柄の吾を可鶏山の可頭乃木の我をかつさねもかつさかずと  
も  
14 三四三二

**カツラ** かつら カツラ科の落葉喬木。

山地に自生する。葉は心臓形をなし縁には鋸齒がある。葉に先だつて五月頃紅色の小さい花が咲く。

向つ岡の若楓の木下枝取り花待つ間に嘆きつるかも  
7 一三五九

**カニハ** 未詳。

シラカバ・チヨウジザクラと各種の説がある。シラカバは高山の寒冷地に適するもので、万葉当時大和方面にあつたかどうか疑問である。

味きはふ 妹が目離れて 敷妙の 枕も巻かず 椀皮巻き  
作れる舟に…… 山部赤人 6 九四二

**カハラフヂ** かはらふぢ マメ科。

原文「葛葉」を新訓ではサウケフと訓んでゐる。本草和名には

カハラフヂと訓んでゐる。これに二種あつて現名サイカチの方は喬木。ジャケツイバラの方は灌木。

この歌では現名サイカチの方がよいと思はれる。序として使はれてゐる。

葛葉に延ひおほどれる 屎葛絶ゆることなく宮仕へせむ  
16 三八五五

**ハヤナギ** わこやなぎ ヤナギ科の落葉灌木。

河岸などに自生する。早春猫の尾のやうな花がつく。  
丸雪降り遠江の吾跡川揚莉れども亦も生ふとふ余跡川揚

**カヘ** かや イチキ科 常緑喬木。  
7 一二九三

扁平な針状の葉が左右に並んでゐる。  
霍公鳥 求鳴く五月に(中略) 松柏の 榮えいまさね……  
大伴家持 19 四一六九

**カヘルデ** かへで カヘデ科の落葉喬木。

葉が蛙の手に似てゐるから蛙手と呼び、後ルを略してカヘデと称した。更に後世紅葉する諸木の代表として、モミヂとも呼ばれる。

吾が宿に黄葉つ暇手見る毎に妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し

**オバナ** 種々の説あり、昼顔説が最も多い。

**カホバナ** 未詳。

古来アサガホ・カキツバタ・ヒルガホ等の諸説があり、その中で昼顔に、カツボウといふ方言のあるのを有力な根拠としてこれを支持する説が多い。

8 一六二三

例歌は四首あるが悉く恋の序詞又は譬喩として使はれてゐる。  
高田の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

8 一六三〇

**カヤ** 薄 すすき ホモノ科の宿根草。

カヤは薄を屋根に葺く場合の材料として呼ぶ名。或ひは薄に限らずその他禾本科の草を屋根に葺く時の名とする説もある。

吾が背子は仮慮作らす草なくば小松が下の草を刈らさね

中皇命 1 一一

岡に寄せ我が刈る加夜のさね加夜のまこと柔は寝るとへなか

14 三四九

**カラアキ** けいとウ ヒユ科一年生草本。

ツキクサ・ベニバナ・ケイトウの諸説があるがケイトウが最も支持される。今日も観賞用とする。

恋の譬喩や序詞に多く使はれる。

隠りには恋ひて死ぬともみそのふの鶏冠草の花の色に出でぬ

11 二七八四

吾が屋戸に幹藍時き生ふし枯れぬれど懲りずてまたも詩かむ

3 三八四

**カラタチ** からたち マツカゼサウ科の落葉灌木。

その幹に大きい棘を持つので家の垣によく植ゑる。例歌の第二句のウバラは其れを指す。樹の皮は青い。葉は三枚、葉柄に翅がある。色は白色。

萩の棘原刈り除け倉立てむ屎遠くまれ櫛作る刀自

16 三八三二

**キミ** きび ホモノ科一年生草本。

我が国に古く渡来した穀類である。淡い黄白色の実で粟より少し大粒である。うるちきびともちきびとある。

古りにし人の食させる吉備の酒病めばすべなし貫簞賜ばらむ

丹生王 4 五五四

梨霽寸三に粟嗣ぎ延ぶ葛の後もあはむと葵花咲く

16 三八三四

**クス** くす マメ科の蔓性宿根草。

三枚の葉が長い莖の先につく。莖はのびて強い蔓となつてたくましく延びる。葉腋に蝶の形をした紫色の花がつく。

観賞的に詠んだものもあるが、蔓がたくましくのびるその性質を捉へて恋の序としたものも多い。

夏葛の絶えぬ使の不通ぬれば事しもある如思ひつるかも

坂上郎女 4 六四九

女郎花咲沢の辺の真田葛原何時かも絡りて吾が衣に着む

7 一三四六

水葦の崗の田葛葉を吹き反し面知る児等が見えぬ頃かも

16 三〇六八

**クソカツラ** へくそかづら アカネ科の多年生草本。

蔓をなし、全体に一種の臭気がある。夏の頃朝顔形の極めて小さい花を開く。

この一首のみで、序詞に使はれてゐる。

葛葉に延ひおほどれる屎葛絶ゆることなく宮仕へせむ

16 三八五五

**クハ** くは クハ科の落葉喬木。

葉を蚕の飼料とする。

たちねの母の其の葉の桑すらに願へば衣に著ると言ふもの

7 一三五七

クリ

種子を食料とする。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば況してしぬばゆ(後略)

5 八〇二

クレナキ

葉は縁に刺があり、夏の頃紅い薊に似た花を開く。花は染料、莖は食用になる。

例歌には紅花そのものとして詠まれたものは唯一首のみで、他はみな染料又は染色されたものが詠まれてある。然もその多数は恋歌の序として使はれてゐる。

謂ふことの恐とき国ぞ紅の色にな出でそ念ひ死ぬとも

4 六八三

松浦河河の瀬早み久礼奈翁の裳のすそ沾れて鮎か釣るらむ

5 八六一

紅に衣染めまく欲しけれど著てにはばや人の知るべく

7 二二九七

コケ

さるをがせ サルヲガセ科。

深い山の木などに垂れ下つて糸状をしてゐる。例歌のいくつかは蘼苔類にも通じるやうだが、やはりサルヲガセが最も妥当であらう。殆どがコケムスと合熟語になつてゐて、永久にとか、恐し、などの形容或ひは譬喩序詞に使はれてゐる。

何時の間も神さびけるか香山の餘帽が本に蔭生むまでに

鴨足人 3 二五九

奥山の磐に蘿生し恐くも問ひたまふかも念ひあへなくに

6 九六二

妹が名は千代に流れむ姫鳥の子松が末に蘿生すまでに

河辺宮人 2 二二八

コナラ

山野に自生する。栗の葉より少し短く、縁には粗い鋸歯がある。春季、黄褐色の花を開く。集中にハハソとあるもこの木のことである。

例歌は恋歌の譬喩に使つてある。

下毛野 みかもの山の 許奈良の如す 真麗し見ろは たが

けか持たむ

14 三四二四

コノテガシハ

従来諸説あり、ヒノキ科の側柏・カシハの若葉ナラの若葉等、その他がありいづれも根拠ある説だが、側柏は後世の渡来であるらしいから、ナラの若葉説が最も有力かと思はれる。

二例いづれも序に使はれてゐる。

奈良山の児手柏の両面に左にも右にも倭人の徒

千葉の野の古乃豆加之波の含まれどあやに愛しみおきてたか

16 三八三六

コモ

まこも ホモノ科の宿根草。

20 四三八七

沼や沢に生え、葉は細長く、秋の頃穂が出る。

枕詞に多く使はれる。又製作されたものとして藁畳・藁枕・食

藁などが見える。

飼飯の海の庭よくあらし蒨藁の乱れ出づ見ゆ海人の釣船



3 二五六

薦枕相ひ巻きし子も在らばこそ夜の更くらくも吾が惜しみせ  
め  
7 一四一四

覺唐隔て編む教通はさば道の柴草生ひざらましを

11 二七七七

**サカキ** さかき ツバキ科の常緑亜喬木。

葉の縁に鋸歯がない。普通ヒサカキを代用に用ゐるがこれは葉の縁に鋸歯がある。花も実もヒサカキよりは大きい。

ひさかたの 天の原ゆ 生れ来る 神の命 奥山の 賢木の  
枝に……  
3 三三七九

**サキクサ** 未詳。

古来諸説に分れ、ミツマタ・ササユリ・ヤマユリ・ヂンチヨウ  
ゲ・ツリガネニンジン・イカリサウその他なほ救種あるが、ミツ  
マタを支持する者が最も多い。

例歌二首はどちらも枕詞であるが前者は形の上から後者は音の  
上からかかつてゐる。

世の人の……いざ寝よと 手を携はり父母も 表へな離り  
三枝の 中を寝むと……  
山上憶良 5 九〇四

春去れば先づ三枝の幸くあらば後にも逢はぬ莫恋を吾妹

10 一八九五

**サクラ** さくら バラ科の落葉喬木。

我が国固有の花であるが、万葉の場合は専ら山桜を言つたもの  
と思ふ。

梅の花咲きて散りなば桜花纏ぎて咲くべくなりにてあらずや

5 八二九

**サナカツラ** (サネカツラ) びなんかづら モクレン科の蔓性灌木。

葉は楕に似て柔かく光沢あり、夏季淡い黄色の花が咲く。実は  
球状に群がつてみのり、紅く熟する。

例歌の大部分は枕詞や序詞として使はれてゐる。

核葛後も逢はむと夢のみをうけひ渡りて年は経につつ

11 二四七九

玉くしげ将見<sup>みひろのやま</sup>円山の狭名葛さ寝ずば遂に有り勝ましじ

2 九四

**ササ** くまざさ ホモノ科。

山野に自生し又庭園にも植ゑられる。丈はあまり高くない、葉  
は比較的広い。

小竹<sup>ササ</sup>の葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ来ぬれば

柿本人麿 2 一三三

**アララギ** さはひよどり キク科の宿根草。

「本草和名」には、サハアララギ一名アカマガサと記してゐる。  
藤袴に似てゐる。

天皇、太后、共に大納言藤原家に幸しし日、黄葉せる沢蘭一  
株を抜き取りて……  
19 四二六八 題詞

**キミ** しきみ モクレン科の常緑樹。

山地に自生するが又墓地などにも植ゑられる。葉は滑らかで長  
楕円形、四月頃葉腋に淡黄色の花を開く。実は毒だといはれる。

歌は一首だけで、「しくしく」にかかる序となつてゐる。

奥山の櫛が花の名の如やくしくしく君に恋ひわたりなむ

20 四四七六

**シダ** 未詳。

今日のノキシノブだともいはれる。剣のやうな細長い形の葉で、裏に二列の干囊があり、古木の幹や岩や人家の軒などに生える。

吾が屋戸の軒の子太草生ひたれど恋忘草見るに未だ生ひず

11 二四七五

シヌ (シノ) ホモノ科。

例歌には「細竹」「小竹」の字面が使つてあるのを見れば、大體弱い柔かな感じを持つものであることは推察される。

山田博士は、薄・葦・萩等の総称とされるが、用字の点から見てやはり今日のメダケなどを指したと見る説が至当であらう。

やすみしし 吾が大王…阿騎の大野に旗薄 四龍を押しなべ… 柿本人麿 1 四四五

妹等所我が通ひ道の細竹すき我し通はば靡け細竹原

7 一一二一

シバ ホモノ科の宿根草。

山野や路傍に自生する。地面を匍ひつつ細い鬚根を出す。例歌のシバには草と木と両方の場合があると思はれるが、草の場合は植物名であり、木の場合は普通名詞と見られる。

庭中の阿須波の神に古志波さし吾は斎はむ帰り来までに

防人歌 20 四三五〇

大原のこの市柴の何時しかと吾が念ふ妹に今夜逢へるかも

志貴皇子 6 五一三

立ち易はり古き京となりぬれば道の志婆草長く生ひにけり

田辺福麿 6 一〇四八

シヒ しひ ブナ科の常緑喬木。

葉は硬くて裏面は褐色。初夏黄色の香の強い花の穂を出す。スダジヒの実は尖り、ツヅラジヒは円い。

家にあらば筒に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

2 一四二

シラカシ しらかし ブナ科の常緑喬木。

葉は細長く裏は淡い緑色をなし鋸歯がある。

あしひきの山道も知らず白社材の枝もとををに雪の降れば

10 二三一五

シリクサ さんかくる カヤツリグサ科の宿根草。

湿地に生える。莖は三角形をなし、頂近く茶褐色の小花がつく。又サギノシリサシともいふ莖は敷物に造られる。

例歌は恋の序詞で、「知り」といふ同音を引き出す為に使はれてゐる。

湖葦うみあしに交れる草の知草の人皆知りぬ吾が裏念うらねん 11 二四六八

スガ すが カヤツリグサ科の宿根草。

沼沢などの湿地に生える。カヤツリグサに似てゐるが、葉の形はずつと大きい。雄花は莖の上方に、雌花はその下に出る。笠や簍などを造る。

いざ見ども倭へ早く白菅の真野の榛原手折りて行かむ

3 二八〇

かきつばた開き沼の菅を笠に縫ひ著む日を待つに年ぞ経にけ

11 二八二一

足柄の麻万の小菅の菅枕あしはら何ぜか纏かさむ見ろせ手枕

14 三三六九

湊のや葦が中なる玉小菅刈来わが背子床せこどの隔へだちに

スギ すぎ マツ科の常緑喬木。

14 三四四五

杉は神社に多く植ゑられてゐる。神聖な樹木と考へられてゐたらしく、神杉とか、神さぶ・忌ふなどの語を冠して用ゐられ、例歌の大部分がさういふ傾向のものである。又、スギといふ音が「過ぎ」に通じるところから「過ぎ」の序詞として使はれてゐる。

神南備の三諸の山に齋ふ杉思ひ過ぎめや蘿生すまでに

13 三二二八

何時の間も神さびけるか香具山の餘楯が本に蔭生すまでに

3 二五九

スズ すずたけ ホモノ科。

山野に自生し、籠や敷物などに使はれる。信濃はスズが多く出るので「信濃」の枕詞となつた。

み藪荊る信濃の真弓吾が引かばうま人さびて否と言はむかも

禪師 二九六

ススキ すすき ホモノ科の宿根草。

古代は至るところの山野に繁つてゐて旅の仮泊に造る仮廬の屋根を葺く材料とした。穂に出たものを「穂」「尾花」と呼んでゐる。「穂に出る」といふ場合の枕詞又は序詞としてもかなり使はれてゐる。又純粹に觀賞植物としても取り上げられてゐる。

旗須珠寸尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代までに

元正天皇 8 一六三七

秋萩の花野の為酔す穂には出でず吾が恋ひわたる隠り妻はも

10 二二八五

スミレ すみれ スミレ科の宿根草。

原野に自生してゐる。花は濃紫色。葉は長い楕円形で柄に翼がついてゐる。食料にもされた。

集中にツボスミレとあるものをスミレと區別して二項目とした。

春の野に須美礼探みにと求し吾を野をなつかしみ一夜寝にける

スモモ すもも バラ科の落葉木。

8 一四二四

春の頃白い五瓣の花を開く。桜の花に似てゐる。果実は酸味が多いのでスモモの名がある。

吾が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも

19 四一四〇

セリ 芹<sup>セリ</sup> カラカサバナ科の宿根草。

水辺に自生し匍ひ枝を延ばす。今も葉の香りを愛して春季食用にする。

あかわさす屋はたたびてぬばたまの夜の暇に採める芹子<sup>セリ</sup>これ

20 四四五五

タク かつ クハ科の落葉喬木。

桑の葉のやうな形で少し大形。樹皮は紙の材料となる。古代は衣料の材料とされ、その色が白色であるからシロタへといふ語が出来る、それが後には白色といふ意味に迄なつた。又繩や綱にも造られ、タクツヌ・タクナハといはれた。又その纖維で織つた糸を木綿と呼んでゐる。

白妙の袖解き交へて還り来む月日を教みて往きて来ましを

丹比笠麿 4 五一〇

栲繩の永き命を欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ

巫部麻蘇娘子 4七〇四

木綿懸けて祭る御室の神さびて齋ふにはあらず人目多みこそ

7一三七七

栲領布の懸けまく欲しき妹が名を此の勢の山に懸げば如何に

3二八五

タケ

たけ

集中の竹は竹類の総称で事実には種々なるものを含んでゐたであらう。ナヨタケなどは弱々しい竹の意。サス竹の語義は不明だが、これも固有名詞でないと思はれる。

秋山の したぶる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさま

に 念ひ居れか… 柿本人麿 2二二七

刺竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君

石川足人 6九五五

大和には聞えもゆくか大我野の竹葉刈り敷き廬せむとは

9一六七七

タチバナ

みかん まつかぜさう科の常緑喬木。

葉は比較的小さく柄には翼がある。果実は古くから食料とされた。ウンシユウミカンよりも小さい。

橘の蔭履む路の八衢にものをぞ念ふ妹に逢はずて

2一二五

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に雨降れどいや常葉の樹

聖武天皇 6一〇〇九

吾が屋前の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく実になりにけり

大伴家持 8一四八九

タデ

やなぎたで タデ科の一年生草本。

湿地、水辺等に生育し、その葉が柳の葉に似てゐるのでヤナギタデと呼ばれる。葉には辛味があり、食料とされる。

タデの歌は僅か三首だが枕詞及び序にだけ使はれてゐる。

吾が屋戸の穂蓼古幹探み生し実になるまでに君をし待たむ

11二七五九

タハミヅラ

未詳。

三積草・蓴菜・玉葛・ひるむしろ等種々の説がある。歌趣から押すとひるむしろが一番条件にあふので支持される。

この一例だけが植物の性質がかなりよく歌はれてゐる。恋の序となつてゐる。

安房をろのをろ田に生はる多波美豆良引かばぬるを吾を言

14三五〇一

タマカヅラ

未詳。

蔓性植物の総称とも言ひ、又、テイカカヅラヤスヒカヅラ・クズ・サネカヅラ・ゴトウヅル等の諸説がある。

例歌十首ばかりあるが全部枕詞・序詞・譬喩等に使はれてゐる。

玉葛実ならぬ樹には千早ぶる袖ぞ着くとふ成らぬ樹毎に

大伴安麿 2一〇一

玉葛絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ

10二〇七八

谷迫み峰辺に延へる玉葛蔓へてしあらば年に来ずとも

12三〇六七

タマバハキ

かうやばうき キク科の落葉灌木。

山地に自生し叢状を呈する。葉は卵状で毛があり、粗い鋸歯がある。現在正倉院御物の中に目利箒といふのが遺つてゐる。正月初の子の日に天皇は辛鋤を以て籍田を耕し、皇后は玉箒をとつて蠶神を祭る風が、中国から伝はつた。その時用ゐる箒には玉を飾るのでタマバハキと言ふ。

玉掃苧り来鎌麻呂室の樹と書が本をかき掃かむ為

16 三八三〇

始春の初子の今日の多麻婆波伎手にとるからに掃らぐ玉の

大伴家持 20 四四九三

チ 茅 <sup>ち</sup>ホモノ科の宿根草。

一般にはツバナと称して穂の出たものが親しまれる。例歌の大部分は「浅茅」と熟語になつて使はれてゐる。

浅茅原つばらつばらに物念へば故りにし郷し念ほゆるかも

3 三三三三

君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈りそね

7 一三四七

6 九四 7 一一七九 7 一三四二等

チサ 未詳。

従来二説あり、チシヤノキ(一名カキノキダマシ、ムラサキ科)とエゴノキ(一名ロクロギ、エゴノキ科)をあてる。花は前者は七月頃白い五瓣の小花が円錐状につき、後者は初夏の頃、それよりは少し大きい五裂の合瓣花が咲く。

大己貴 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらし……知左の花

咲ける盛に…… 大伴家持 18 四一〇六

チチ 未詳。

古来イテフとするものとイヌビハ(一名イチジク)とするものがある。二つとも方言にチチノキの名がある。

知智の実の 父のみこと ははそばの 母のみこと おほろかに…… 大伴家持 19 四一六四

ツガ つが マツ科の常緑喬木。

山地に自生し、葉は扁平の線形をなし先端が矢筈形に二つに割れてゐる。果実はまつかさの様に鱗がある。

例歌五首のうち四首まで「継ぎ継ぎ」にかかる枕詞となつてゐる。

玉禊 歎火の山の(中略) 神の盡 櫻の木の いや継ぎに

柿本人麿 1 二九

ツキ ツキ ツキ科の落葉大喬木。

葉はやや長い卵形で鋸歯がある。

打蟬と 念ひし時に(中略) 走り出の 堤に立てる 槻の木

2 二一〇

ツキクサ ツキクサ科の一年生草本。

葉は柔かく、花は芽えた藍色。苞をかむつてゐる。この花からアラバナを造り染める時の下絵を描く。古代は摺り染に使つた。

色が褪せ易いので恋の心変りの譬喩や序詞に使はれる。又強い日射に耐へず萎える生態をもよく捉へてゐる。

月草の移ろひ易く念へかも我が念ふ人の言も告げ求ぬ

坂上大嬢 4 五八三

朝露に咲きすさびたる鴨頭草の日更くるなへに消ぬべく念はゆ

月草に衣ぞ染むる君が為まだらの衣摺らむと念ひて

10 二二八一

ツギネ 未詳。

7 一二五五

植物名ではないと見る説もある。植物とする学者は、ヒトリシツカ又はフタリシツカを当てる。

次嶺生 山背道<sup>ひもとみ</sup>を 他夫<sup>おのづま</sup>の 馬より行くに 己夫<sup>おのづま</sup>し 歩<sup>から</sup>より 行けば…… 13 三三一四

ツゲ ツゲ科の常緑灌木。

光沢をおびた橢円形の小葉が密生する。イヌツゲとよく似てゐるがツゲは葉が対生しイヌツゲは互生する。ツゲは古くから櫛の材料とされた。

例歌は、いづれも黄楊<sup>つげのなぐし</sup>小櫛と歌はれてゐる。

君無くば奈何身装筋<sup>よそ</sup>はむ匣<sup>はこ</sup>なる黄楊の小櫛も取らむとも念はず 9 一七七七

ツタ (イハヅナ・ツヌ) ていかづら ケフチクトウ科の蔓性常緑植物。

葉は長橢円形で対生し葉腋或ひは梢に五裂の白花を開く。

ツタの例歌三首皆枕詞である。

父母が 成しのまにまに(中略) 遠つ国 黄泉<sup>よみ</sup>のさかひに 這ふ都多の 各が向向 天雲の 別れし往けば……9 一八〇四

ツチハリ 未詳。

和名抄「玉孫」の註に都知波利とあり、今日ツクバネサウに当ててゐる。

なほ、レンゲサウ・メハジキ等の諸説がある。

吾が屋戸に生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな

7 一三三八

ツツジ つつじ シヤクナゲ科。

種々な種類があるが例歌の多くは水辺の岩に咲く趣なので、サツキツツジが当つてゐると思ふ。

風速の美保の浦廻の白鷺<sup>しらさぎ</sup>見れども不<sup>な</sup>怜<sup>し</sup>亡<sup>し</sup>き人思へば

水伝ふ磯の浦廻の石躰<sup>いしだま</sup>もく咲く道をまた見なむかも 河辺宮人 4 四三四

2 一八五

ツヅラ ツヅラフヂ科の宿根蔓性植物。

卵形の葉が互生する。夏の頃葉腋に円錐形の淡紅色小花が群生する。

例歌二首とも恋の譬喩である。

駿河の海磯<sup>うし</sup>辺に生ふる浜都豆良汝をたのみ母にたがひぬ

14 三三五九

上毛野安蘇山都豆良野を広み這ひにしものをあぜか絶えせむ

14 三三四四

ツバキ つばき ツバキ科の常緑喬木。

今日は園芸品種が多いが万葉当時は山野に自生するものをさしたと思はれる。

我が門の片山都婆伎<sup>なれ</sup>まこと汝<sup>なれ</sup>我が手触れなば地に落ちもか 防人歌 20 四四一八

も 巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな巨勢の春野を

1 五五四

ツバナ 「チ」を見よ。

茅花抜く浅茅が原のつぼすみれ今盛なり吾が恋ふらくは

8 一四四九

戯奴わげぬけかよふが為吾が手もすまに春の野に抜ける茅花ぞ食して  
肥えませ  
8 一四六〇

ツボスミレ つぼすみれ スミレ科の宿根草。

葉に心臓形で、細長い莖が地上を這ふ。早春薄い紫のすぢのあ  
る白い花が咲く。

ツボスミレの歌は二首見えるが、スミレは「摘む」と言つてあ  
るのに、ツボスミレとある時は「摘む」と言はず観賞的な表現を  
とつてゐる。

山振やぶきの咲きたる野辺の都保須美礼この春の雨に盛りなりけり

8 一四四四

ツヤマ 未詳。

タブノキ・イヌツゲ等の説があり、従来まだ確定してゐない  
が、タブノキが最も妥当性が多い。タブノキは山野に自生する常  
緑喬木で、葉は長い楕円形で厚く全体に光沢がある。

磯の上の都万麻を見れば根を延へて年深からし神さびにけり

19 四一五九

ツミ 未詳。

従来ヤマグヘが諸學者に最も支持されてゐる。

此の夕べ栢のさ枝の流れ来ば梁は打たずて取らずかも有らむ

8 三八六

ツルバミ くぬぎ ブナ科の落葉喬木。

山野に自生する。長い楕円形の葉で縁に鋸齒がある。この実を  
染料とした。

椽の衣は人皆こと無しと言ひし時より服欲しく念ほゆ

7 一三一一

紅は移ろふものぞ都流波美の穢れにし衣になほ及かめやも

大伴家持 18 四一〇九

トコロツラ とくろ ヤマノイモ科宿根蔓草。

葉は卵円形又は心臓形で互生、夏の初め淡黄色の小花が咲く。  
果実は三枚の翼がある。むかごをつけない。

例歌は二首とも序及び枕詞となつてゐる。

皇祖神の神の宮人冬薯蕷トコロツラ葛くわいや常しくに吾反り見む

7 一一三三

ナギ こなき コナギ科の一年生草本。

水田などに自生する。葉は心臓形で柔かく光沢あり。花は紫色  
の六瓣である。嫩葉は食料になる。

例歌は四首あるが恋の序詞とする時はコナギといつてゐる。

奉饗奉日の里の植彘子水葱苗なりと言ひし枝はさしにけむ

大伴駿河麻呂 3 四〇七

醬か酢すに蕪かつき合あてて鯛うねがふ吾にな見せそ水葱みづなのあつもの

16 三八二九

ナシ なし バラ科の落葉小喬木。

今日のやうな美味な品種はなかつたらうが、この当ても食用に  
されたことと思はれる。ヤマナシをこれに当てて考へるのも至当  
と思はれる。

ナシといふ音が「無し」に通ずるので「妻梨の木」などと懸詞  
に使はれてゐる。

黄葉のにはひは繁し然れども妻梨の木を手折りかざさむ

10 二一八八

**ナツメ** なつめ クロウメモドキ科の落葉灌木。

庭に植えられる葉は卵形で光沢あり、縁は多少鋸歯になつてゐる。夏季葉腋に淡黄緑色の小花をつける。実は食用及び薬用にされる。

玉掃灯り来鎌麻呂室の樹と藁が本をかき掃かむ為

16 三八三〇

**ナデシコ** なでしこ セキチク科の宿根草。

夏の頃山野に自生する。葉は細長く、対生してゐる。薄紅の優しい五瓣の花。花びらの先が細糸状になつてゐる。

なでしこの歌は多いが、その殆どが観賞的に詠まれてゐて修辭的に扱はれたものはごく僅かである。

萩が花尾花葛花瞿麦の花をみなへし又藤袴朝統の花

山上憶良 8 一五三八

朝毎に吾が見る屋戸の瞿麦の花にも君はあり来せぬかも

笠女郎 8 一六一六

秋さらば見つし思べと妹が植ゑし屋前の石竹ナデシコ開きにけるかも

大伴家持 3 四六四

**ナノリソ** ほんだはら ヒバマタ科の海草。

一米以上に及び枝を分ち披針形の葉を有す。ナノリソといふ名が「名を告る」に通ずるので、枕詞又は序に使はれる。

住吉の敷津の浦の名告藻の名は告りてしを逢はなくも惟し

12 三〇七六

みさご居る磯廻に生ふる名乗藻の名は告らして上親は知ると

3 三六一二

**ナハノリ** うみぞうめん ベニモヅク科の海草。

十センチから三十センチ程の長い円柱状の草が数本叢生する様は素麺のやうに見える。食料にされる。

例歌は四首程あるが、いづれも序に用ゐられてゐる。海原の奥つ繩栗うち靡き心も萎ぬに念ほゆるかも

11 二七七九

**ナラ** なら ブナ科の落葉喬木。

コナラ・オホナラを含めてナラと呼んだものと思ふ。葉は長楕円形であるが先端の方がやゝ太い。鋸歯を有し互生してゐる。

例歌は序に使はれてゐる。

御獵為る鷹羽の小野の櫟柴の馴れは益らず恋こそ益れ

12 三〇四八

**ニコケサ** 未詳。

一説にハコネシダと呼ぶウラボシ科の羊歯草を当てる。山地の崖や岩に生える宿根草で、いふ形の小葉が多数つく。

ニコといふ音が笑ふ意の「にこ」に通じるので序とされた。四首共みな修辭として用ゐられてゐる。

足柄の箱根の嶺ろの爾古具佐のはなつつまなれや紐解かず寝

14 三三七〇

む 蘆垣の中の似兒草にとよかに吾とあまして人に知らゆな

11 二七六二

**ヌナハ** じゆんさい スキレン科の宿根水草。

池や沼に生ずる。長い柄の先の丸い葉は水面に浮き、茎と共に精液質におほはれてゐる。

この歌も恋の序に使はれてゐる。

吾が情ゆたにたゆたに浮葉ヌナハ辺にも奥おきにかつましじ



ヌバタマ ひあふぎ イチハツ科の宿根草。

7一三五二

葉は劍状をして扇形に開く。花は六片で薄赤い。その実は黒色であるから、夜・闇・黒・髪・夢などの枕詞に使はれる。集中六十余首の作の殆どが枕詞である。

飛ぶ鳥の 明日香の河の……鳥玉の 夜床も荒るらむ……

柿本人麿 2一九四

相思はず君はあるらし黒玉の夢にも見えず誓約て寝れど

11二五八九

居明して君をば待たむ奴波珠の吾が黒髪に霜は降るとも

磐姫皇后 2八九

ネツコグサ 未詳。

筑前の方言で白頭翁をネツコグサと呼ぶので「本草啓蒙」がこれを当ててから支持を得てゐる。花の外部分が白毛で蔽はれてゐるので白頭翁の名がある。

芝付の美宇良佐岐なる根都古具佐相見ずあらば我恋ひめやも

14三五〇八

ネブ(ネム)ねむ マメ科の落葉喬木。

葉は二回羽状複葉で、小葉は夜になると閉ぢるのでネムノキ又はネムリノキといはれる。恋の序となつてゐる。

屋は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花君のみ見めや戯奴さへに見

よ 8一四六一

ハギ はぎ マメ科の落葉灌木。

秋の七草の一つとされて居り、木本だが草といふ感じの方が強い。万葉ではヤマハギのみに限らずその他の種類もハギと呼んだ

と思はれる。

高園の野辺の秋芽子徒らに咲きか散るらむ見る人無しに

笠金村 2二三一

春日野に咲きたる芽子は片枝は未だ含めり言な絶えそね

7一三六三

(2一〇 2二三三 3四五五等)

ハジ

はぜのき ハゼノキ科の落葉小喬木。

葉は奇数羽状複葉。初夏黄緑色の小花が円錐状につく。

古代は弓の材料とされた。

ひさかたの 天の戸開き(中略)皇祖の 神の御代より

波自弓を手握り持たし…… 20四四六五

ハチス はす スキレン科の宿根水草。

泥中に生育する。夏季、紅或ひは白の大輪の花をつける。地下

莖は蓮根と称して食用にし、種も食用とされる。

後世は仏教の影響で死に關聯した花となつたがこの時代はまだ

さういふ考へはなかつたらしい。

蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあ

らし 長忌寸意吉麻呂 16三八二六

ナガツミ 未詳。

真菰説・赤沼アヤメ説等がある。従来マコモ・赤沼アヤメ・ヒメシヤガ等の説がある。その中で赤沼アヤメは花萼蒲の類で白井博士の説くところにより近來この説の支持が多い。

この一例のみで、恋の序に使はれたもの。

をみなへし佐紀沢に生ふる花勝見かつても知らぬ恋もするか

中臣女郎 4六七五

**ハネズ** にはうめ バラ科の落葉灌木。

葉は披針形で鋸齒あり。春の頃、葉に先だつて淡い紅色の五瓣の小花を開く。

四首の歌のうち三種は色の移りやすいことを言つて、そのうち二首は恋の心の変り易い譬喩にしてゐる。植物としてのハネズを歌つたものは一首だけである。

夏まけて咲きたる波瀾受久方の雨うち零らば移ろひなむか  
念はじと白ひてしものを翼酢色の姿ひやすきが心かも

**ハハソ**

コナラを見よ。

山科の石田の小野の柞原見つつかや君が山道越ゆるらむ

**ハマユフ** はまおもと ヒガンバナ科の宿根草。

9 一七三〇

暖かい海岸の砂地に生える。オモトに似てゐるのでハマオモトの名がある。夏季莖の頂に白い六瓣の花が糸の乱れたやうな形に開く。

例歌はこの一首だけで、「百重なす心」と恋の譬喩に使はれてゐる。

み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に相はぬかも

柿本人麿 4 四九六

**ハリ**

はんのき カバノキ科の落葉喬木。

葉は楕円形で鋸齒があり、雄花は房のやうに垂れ、雌花は松かさのやうな形に開く。田圃の端などによく植ゑられてゐる。果実や樹皮は染料となる。又別説に萩とするものもある。

引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに

長忌寸奥麿 1 五七

住吉の遠里小野の真榛以ち摺れる衣の盛過ぎぬる

7 一 一五六

**ヒノキ**

ひのき ヒノキ科の常緑喬木。

山地に生ずるが、多くは植林される。良材として建築その他に古来から重用されてゐる。万葉で「真木」といふのはこの檜や杉などである。

いにしへにありけむ人も吾が如か三輪の檜原に挿頭折りけむ  
動る神の音のみ聞きし養向の檜原の山を今日見つるかも

7 一〇九二

**ヒエ**

ひえ ホモノ科の一年生草本。

水田などに生える野生の稗で、夏季穂が出来球状の種子が出来る。

例歌は二首、いづれも恋の譬喩に使はれてゐる。

打つ田には稗はも数多有りといへど扱えし我ぞ夜一人寝る

11 二四七六

水を多みに上に種蒔き稗を多みええし業ぞ吾が独り宿る

12 二九九九

**ヒカゲ**

ひかげのかづら ヒカゲノカツラ科の常緑草。

深山に見かける。緑の莖は宛も杉のやうに柔かい針を持つてゐて長く地を這ふ。神事の時に用ゐる。

あしひきの山下日影蔓ける上にやさらに梅をしぬばむ

大伴家持 19 四二七八

**ヒサギ**

あかめがしは トウダイグサ科の落葉喬木。

山野に自生する。葉は卵形或ひは円形で時に浅く二三裂し長柄を有してゐる。春に発芽する時葉が真紅で特に美麗だから、「赤芽がしは」と呼ぶ。

ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しげ鳴く  
6 九二五

ヒシ

ひし アカバナ科の一年生草本。池や沼などに生ずる。その葉の形はいはゆる菱形といはれる形をなす。実は黒色で二本の刺を持つてゐる。

君がため浮沼の池の菱採むと吾が染めし袖沾れにけるかも

ヒメユリ

ひめゆり ユリ科の宿根草。濃い赤色の花をつける。花は他種のユリに比べて先端の反りが少く。

例歌は恋の譬喩となつてゐる。

夏の野の繁みに咲ける姫由理の知らえぬ恋は苦しきものを  
大伴坂上郎女 8 一五〇〇

ヒル

のびる ユリ科の宿根草。管状の極めて細長い葉を持ち、特異な香がある。莖の頂に黒い紫色の小さい肉芽を出す。

馨<sup>かほ</sup>酢<sup>す</sup>に蒜<sup>あし</sup>搗きかてて鯛<sup>たう</sup>願<sup>のぞ</sup>ふ吾にな見せそ水葱<sup>みなずあつもの</sup>の薺<sup>なづな</sup>

フジ

ふぢ マメ科の蔓性の落葉樹。四月頃紫色の花をつける。その蔓の纖維を織つて有用な織物として使用した。

藤浪の花は盛になりにけり奈良の都を念ほすや君

3 三三〇  
須磨の海人の塩焼衣の藤衣ま遠くしあれば未だ著穢れず

フヂバカマ

ふぢばかま キク科の宿根草。葉は三裂して対生する。淡い紫色の小花が集つて咲く。よい香ひがする。

萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝貌の花

ホホ

ほほのき モクレン科の落葉喬木。橢円形の大きい葉が傘のやうに集つてゐる。五月頃黄をおびた白色の大きな花を開き、芳香が著しい。果実は大きい毬形をしてゐる。

吾が背子が捧げて持てる保宝我之波あたかも似るか青き蓋<sup>きりかぶ</sup>

僧惠行 19 四二〇二

皇祖神の遠御代御代はい布き折り酒<sup>さけ</sup>飲みきと言ふぞこの保宝我之波  
大伴家持 19 四二〇五

ホヨ

やどりぎ ヤドリギ科の常緑小灌木。地上に生えず、エノキその他の樹上に寄生する。柔かい莖が二又又は三又に別れ梢に細長い葉が対生する。

あしひきの山の木末の寄生取りて挿頭しつらくは千年寿ぐとぞ  
18 四一三六

マキ

ヒノキとする説が多いがやはり特定の樹名ではなく、マは接頭語で褒め言葉。木のうちで特にスグレタ木といふ意味で、ヒノキ・スギ等の有用良木をさしたるもの。

真木柱太き心は有りしかどこの吾が心鎮めかわつも

2 一九〇

マツ まつ マツ科。

松のうちクロマツは主として海岸地帯に、アカマツは山地等に多い。双方をマツと呼んだものである。

樹齡の長い松に永久を祈る歌が多い。又マツといふ音が待つに通ずるので懸詞とした例もある。

吾妹子を早見浜風大和なる吾松楯吹かざるなゆめ

長皇子 1 六五

白浪の浜松が枝の手向草幾代までにか年の経ぬらむ

1 三四

マメ つるまめ マメ科の一年生草本。

ノマメとも呼ぶ。葉は三枚の複葉で、葉のもとに紫色の蝶形の花を三四つける。莖は長く且つ強い。

蔓草の習性をよく見て女の姿態の譬喩とした。

道の辺の茨うづまのうれに這ほ麻米あまのからまる妹をはかれか行かむ

20 四三五二

マユミ まゆみ ニシキギ科の落葉喬木。

山野に自生する。葉は楕円形で対生し、初夏の頃四瓣の小さい花を開く。弓の材料とする。

実物を詠んだものは一首のみで他は枕詞、或ひは月を表してゐる。

天の原ふりさけ見れば白真弓張りて懸けたり夜路は吉けむ

間人宿禰大浦 3 二八九

南淵の細川山に立つ檀弓束巻くまで人に知らえじ

ミツナガシハ 未詳。

7 一三三〇

古来難解とされてゐるが、カクレミノ・オホタニワタリ等が最も有力である。

右一首の歌……三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后紀伊国に遊行びて熊野岬に到り、其の処の御綱葉を取りて還りたまふ……

2 九〇左註

ミラ いら ユリ科の宿根草。

葉は平たい線形をなす。夏の頃白色の小花が傘のやうに群がり咲く。葉は食用になる。ククミラは葦ミラの意。

伎波都久の圃の葦美良我採めど籠にも満たなふ背なと採まさ

14 三四四四

ミル みる ミル科の海草。

濃緑色の円柱状をした枝が多く分岐してゐる。食用にされる。例歌の殆どはフカミルと熟語にされ、深めるといふ語にかかる

修辭となつてゐる。

つぬさはふ 石見の海の 言さへぐ 韓の埼なる いくりにぞ 深海松生ふる 荒磯にぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡き寝し児を 深海松の 深めて思へど……

柿本人麿 2 一三五

ムギ 麦 ホモノ科の一年生草本。

我が国の重要な主食の一つとなつて来た。古代日本にはコムギはなくオホムギである。

馬柵越しに麦は昨は駒の罵らゆれど猶し恋しく思しなひかてぬを

12 三〇九六

ムケラ かなむぐら クハ科の一年生の蔓草。

葉はカヘデに似てゐて莖は長くのび、とげを生じてゐる。秋、淡緑色の小花が咲く。

何ならむ時にか妹を牟具良生の磯しき屋戸に入り座せなむ

大伴田村大嬢 4七五九

ムラサキ 紫草 ムラサキ科の宿根草。

山野に自生する。葉は披針形で互生、夏白色の小花をつける。

根は紫色の染料となる。

紫草の匂へる妹をにくくあらば人媿故に吾恋ひめやも

天武天皇 1二一

託馬野に生ふる紫衣に染め未だ服ずして色に出でにけり

笠女郎 3三九五

紫は灰指すものぞ海石櫛市の八十の街に相へる児や誰

12三一〇一

(4五六九 7一三九二 7一三九六等)

ムロノキ ねず マツ科の常緑喬木。

海辺又は山地などに自生する。葉は針のやうに細かい葉が密集する。

吾妹子が見し鞆の浦の室木は常世にあれど見し人ぞ亡き

3四四六

メ (ワカメ) わかめ コンブ科。

海藻全体を指すものといふ説も行はれるが、ワカメのことと考へられる。ワカメは広く日本全国の沿岸に生じる。葉は羽状を成して左右に決裂し、その中央を一条の堅い中肋が走つてゐる。

志可の海人は軍布苅り塩焼き暇無み髪梳の小櫛取りて見なく

モ 各種の藻の総称。

石川少郎 3二七八

万葉では玉藻・奥つ藻・辺つ藻・靡き藻・川藻・菅藻・伊都藻などと熟語にしても用ゐる。古代は藻を焼いて塩を採つたこと周知の通りである。

玉藻刈る奥方は榜がじ敷妙の枕のあたり忘れかねつとも

藤原宇合 1七二

沖つ藻を隠さふ浪の五百重千重しくしくに恋ひわたるかも

11二四三七

海の底奥を深めて生ふる藻の最今こそ恋はず無き

11二七八一

モムニレ はるにれ ニレ科の落葉喬木。

葉は卵形で先端尖り縁に鋸齒がある。葉に先だつて黄緑色の小花が開く。嫩葉は食料になる。

押照るや難波の小江に(中略) あしひきの この片山の

16三八八六

モモ 桃 バラ科の落葉喬木。

早春薄紅い五瓣の花が咲く。果実は食料となる。

花が美しいので若い女の形容に使はれる。

向つ峯に立てる桃の樹成らめやと人ぞ耳言きし汝が情ゆめ

7一三五六

愛しきやし吾家の毛桃本しげみ花のみ咲きてならざらめやも

7一三五八

春の苑くれなるにはふ桃の花した照る道に出で立つ嬌嬌

大伴家持 19四一三九

モヨグサ 未詳。

ツキクサ・菊にモヨグサの別名があると言はれるが、菊は後世の輸入である。併しツキクサを直ちにモヨグサと断定してよいか否かなは後考を俟つ。

父母が殿の後の母母余具佐百代いでませ我が来るまで

防人歌 20 四三二六

ヤナギ 柳 ヤナギ科。

柳の種類は多いが例歌は主としてシダレヤナギを言つてゐるやうである。

青柳種との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし

うち離く春立ちぬらし吾が門の柳の末に鶯鳴きつ

笠沙彌 5 八二一

小山田の池の堤に刺す場成りも成らずも汝と二人はも

10 一八一九

ヤマアザミ 山藍 トウダイグサ科の常緑宿根草。

樹蔭などに見る。葉は長楕円形で先が尖り対生する。花は黄緑色で穂状をなす。葉は染料になる。大嘗会の小忌衣はこれで摺る。

級照る 片足羽河の さ丹塗の 大橋の上ゆ 紅の 赤裳裾

引き 山藍用ち 摺れる衣服て

ヤマスゲ

ヤマスゲの歌はかなりあるが、その中には、スゲに類すると思はれるものと、いはゆるジヤノヒゲ等の麦門冬に類するものと二種類あるやうである。スゲの種類ひは笠などを作るカサスゲは無

く山中などに生えるカンスゲのやうなものと思はれる。ヤマスゲの歌の中には笠に關したものは見当らない。

山菅の実成らぬ事を吾に依せ言はれし君は誰とか宿らむ

坂上郎女 4 五六四

山菅の乱れ恋のみせしめつつ逢はぬ妹かも年は経につつ

11 二四七四

あしひきの山菅の根のねもころに吾はぞ恋ふる君が光儀に

12 三〇五一

ヤマタテバナ

薺柑子 ヤブカウジ科の常緑小灌木。

陰地に生ずる。葉は輪生する。夏日青白色の小花を開き、冬季球状赤色の果実を結ぶ。

この雪の消遣る時にいざ行かな山橘の実の照るも見む

大伴家持 10 四二二六

あしひきの山橘の色に出でよ語らひ繼ぎて逢ふこともあらむ

春日王 4 六六九

ヤマタツ

にはとこ スヒカヅラ科の落葉灌木。

葉は羽状複対生し、縁に鋸齒がある。春季、白い小花が群がり咲き、初夏粟つぶのやうな実が集り生ずる。

葉が対ひ合つてゐるので「迎へ」の枕詞に使はれてゐる。

君が行き日長くなりぬ山多豆の迎へを行かむ待つには待たじ

2 九〇

ヤマチサ

未詳。

エゴ(エゴノキ科)・アブラチヤン(クスノキ科)・イハタバコ(イハタバコ科)等いづれも、チサ・チサの名があるので各々主張されてゐる。前二者は木で、後者は草である。エゴは白色の美し

い花。イハタバコは紫色、この歌の場合アブラチヤンは最も妥当性が薄い。

氣の緒に念へる吾を山藨苺の花にか君が移ろひぬらむ

7 一三六〇

山藨苺の白露重みうらぶるる心を深み吾が恋ひ止まず

11 二四六九

ヤマブキ 山吹 バラ科の落葉灌木。

黄色の花を五月頃開く。一重は実を結び、重瓣は結実しない。

花咲きて実はならねども長き日に念ほゆるかも山振の花

10 一八六〇

妹に似る草と見しより吾が標めし野辺の山吹誰か手折りし

大伴家持 19 四一九七

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

高市皇子 2 一五八

ユヅルハ ゆづりは トウダイグサ科の常緑喬木。

庭に栽培される。長楕円形の葉は梢に集つて互生する。葉柄は

紅色をおびてゐる。

古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く

2 一一一

ユリ 百合 ユリ科の宿根草。

百合類を総称したものであらうが山百合・笹百合等が最も多かつたことと思ふ。

花の美しさを「笑む」に懸ける序とし、或はユリといふ音を後

といふ意味のユリに懸ける序としたりする。又その花を纏ともした。

あぶら火の光に見ゆる我が纏佐由利の花の笑まはしきかも

大伴家持 18 四〇八六

燈火の光に見ゆる佐由理花後も会はむと思ひそめてき

18 四〇八七

道の辺の草深由利の花咲に咲まししからに妻といふべしや

7 一二五七

ヨモギ よもぎ キク科の宿根草。

山野至る所に自生する。春の若葉を餅に入れる。又薬用ともなる。

歌は唯一首だけで、それを纏としたことを知り得る。

大君の 任のまにまに(中略) ほととぎす 来鳴く五月の

あやめぐさ余母疑蔓き…… 18 四一一六

ワカメ

メを見よ。

比多瀧の磯の和可米の立ち乱え吾をか待つなも昨夜も今夜も

14 三五六三

ワスレグサ やぶくわんざう ユリ科の宿根草。

剣形の柔かい葉が重り合つて生じ、七月頃百合に似た赤色の美しい花が八重咲に開く。

ワスレグサはその名の如く物事を忘れなれといふ意味を持つ草

として、殊に恋歌によく使はれ、その効果なく恋を忘れることが

出来ない時に罵つて「醜草」と呼んでゐる。

萱草 吾が紐につく香具山の故いにし里を忘れぬが為

大伴旅人 3 三三四

萱草垣も繁みに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり

14 三〇六二

**ワラビ** 蕨 ウラボシ科の宿根草。

山野に自生する。早春、根茎から新葉が、こぶしのやうな形に出る。大きくなれば開いて羽状となる。嫩葉は食料となる。又根茎から蕨粉がつくられる。

石激る垂水の上のさ and 良妣の萌え出づる春に成りにけるかも

8 一四一八

**エグ** 未詳。

古來、セリ・エミクサ・エグイモ・クワキ・クロクワキ等の説がある。

君が翁山田の沢に恵具採むと雪消の水に裳の裾沾れぬ

10 一八三九

**ヲギ** 荻 ホモノ科の宿根草。

葉及び花穂はススキに似てゐる。

神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に

4 五〇〇

**ヲミナヘシ** をみなへし ヲミナヘシ科の宿根草。

山野に自生し、或ひは栽培もする。葉は羽状で対生し、秋の頃粟粒のやうに小さい黄色の花が傘形に群がる。

觀賞用にもされ又枕詞などにも使はれる。

手に取れば袖さへ匂ふ美人部師この白露に散らまく惜しも

10 二一一五

娘子部四咲沢に生ふる花勝見かつても知らぬ恋をするかも

4 六七五

## 大和萬葉旅行 第二回 昭和二十九年八月

万葉地蹟の文學的鑑賞を正確に美しく聞き知ることができずのみならず、建築・絵画・彫刻等の古美術を含んで広く大和古代文化について各専門の講師が、終始同行して説明されます。皆様の御質問にも親切にお答へします。

### 見学予定 三十餘ヶ所

八月十一日 午前八時半「国鉄奈良駅」待合室集合。東京発

「湊町行」夜行に乗れば、この時刻に奈良駅に着きます。(近畿鐵道奈良駅)は別です。違へぬやうに)

▽博物館 ▽東大寺 ▽三月堂 ▽戒壇院

▽万葉植物園 ▽高田山 ▽新薬師寺 ▽薬師寺 ▽唐招提寺

▽奈良京址 ○奈良市博物館前「日吉館」宿泊。

▽飛鳥京 藤原京 ▽明日香川 ▽聖林寺

▽朝倉 ▽倉梯山 ▽長谷川 ▽長谷山 ▽長谷寺 ▽阿騎野 ▽忍坂 ▽室生寺 その他

○室生寺(又は長谷寺) 宿泊。

八月十三日 ▽吉野山 ▽檜隈 ▽巨勢山 ▽法隆寺 ▽法輪寺

○法隆寺(又は当麻寺) 宿泊。

八月十四日 ▽二上山 ▽当麻寺 ▽龍田川等見学(解散)

同夜は・京都・大阪等で宿泊又は夜行で帰京等自由行動。

参加会費 金三千五百円 (大和までの旅費、帰りの旅費は自弁のこと)

注意 詳細は発行所にお問合せ下さい。